

「上智大生殺人事件」から 26 年 被害者の父親が語る「決して犯人逮捕をあきらめない」

9/9(金) 6:00 配信

デイリー新潮 DAILY SHINCHO



[26 年前の事件で命を落とした小林順子さん](#)

平成に起きた凶悪事件のなかでも、世田谷一家殺人事件、八王子スーパーナンペイ射殺事件と並んで、三大未解決事件に数えられる「上智大生殺人事件」。9 日で発生から 26 年を迎えるこの事件を警察は威信をかけて追いつけているが、未だ犯人の検挙には至っていない。惨劇から長い年月を経たいま、被害者の父親が遺族の抱える葛藤、そして、非業の死を遂げたわが子への思いを語った。【水谷竹秀/ノンフィクション・ライター】 [【写真】順子さんの憧れだった筑紫哲也氏からは色紙が贈られた](#) ***

それはちょうど 1 年前の命日に当たる 9 月 9 日のことだった。 殺害された小林順子さん（当時 21）の父、賢二さん（76）から、私の携帯電話にこんなメッセージが届いた。「今年は 25 年目という大きな節目の年で、メディア各社から取材の要請がたくさん入りました。ですが来年以降が心配です」

事件発生から 26 年目は、節目の年に比べて報道が減ってしまい、風化してしまうのではないかという懸念である。未解決事件の場合、報道の数に比例して世間の関心を引くため、特に節目の年は普段以上に情報が集まりやすい。また遺族の声は、現在もどこかに潜伏している可能性のある犯人に対して、「忘れていないよ」というメッセージにもなる。 だから遺族としては、命日を前に、報道機関からの取材申し込みがどれだけ入るのが気掛かりなのだ。 その節目の年から間もなく 1 年となる今年の夏の終わり。賢二さんに状況を尋ねると、こう返ってきた。「まだ全てが来ているわけじゃないけど、従来の 90% は取材の要請が入っています。我々としては大変ありがたいです」

筑紫哲也に憧れ、ジャーナリストを目指していた

あの日は朝から雨が降り続いていた。 上智大学 4 年生だった順子さんは 1996 年 9 月 9 日夕、東京都葛飾区の自宅にいたところ、何者かに刃物で刺され、放火された。遺体は 2

階にある両親の和室で見つかった。口を粘着テープでふさがれ、首には複数の刺し傷があった。傷痕から小型刃物が使われたとみられるが、犯行に使われた凶器は見つかっていない。両手は粘着テープで、両足はストッキングでそれぞれ縛られ、遺体には布団がかけられていた。着衣に乱れはなく、死因は失血死とみられる。現場近くでは、レインコートを羽織り、傘をさして立っている不審な男の姿が目撃されていた。賢二さんは、こう悔しさを滲ませる。「順子は事件の2日後、米シアトル大学の留学に向けて日本を発つ予定でした。筑紫哲也さんのファンで、筑紫さんがキャスターを務める『ニュース 23』は毎晩欠かさず観ていました。将来はジャーナリストになりたかったのです。その順子がなぜ、何の恨みがあって、なぜ我が家だったのかと今も問い続けています」

遺族の胸中に押し寄せる不安

発生当初から賢二さんの心の中で繰り返される「なぜ」——。その答えが明らかになる日は、果たして訪れるのだろうか。警視庁はこれまでに、捜査人員のべ11万4895人（8月31日現在）を投入し、順子さんの交友関係を中心に8000人以上から事情聴取した。しかし未だに犯人の特定には至っていない。賢二さんは、妻の幸子さん（76）とともに、毎朝晩、自宅の仏壇に手を合わせ、早期の事件解決を願いつづけてきた。殺人事件被害者遺族の会「宙の会」（事務局・東京都千代田区）の会長としても活動し、殺人事件の公訴時効撤廃を訴え、2010年4月に成立した。その半年後には、空き地になっていた事件現場に消防団の格納庫、そして「順子地蔵」が完成した。だが、いつまで経っても犯人逮捕の一報が耳に入ることはなく、時代の移り変わりとともに賢二さんの胸のうちには不安がじわじわと押し寄せてきた。

「事件発生時は現場検証や事情聴取なども含めて警察との接点が毎日のようでありました。ところがそうした接点も徐々に減っていき、事件に関して警察に寄せられる情報も先細ってきました」警視庁によると、これまでに集まった情報は1662件（8月31日現在）。今年は16件と昨年を下回り、情報件数は減少傾向にあるという。有力情報の提供者に支払われる懸賞金は上限800万円だ。未解決事件の遺族は、捜査の進捗状況を警察から伝えられることがほとんどない。そのため捜査がどの程度進んでいるのか分からないまま、犯人逮捕を待ち続けなければならないのである。賢二さんが素直な気持ちを吐露する。「本当に捜査をやっているのかと疑問に思うこともありました」

過去には、別の事件で逮捕された犯人について、警察から顔写真の確認を求められる時もあったが、近年はそういうやり取りもなくなった。「そりゃ26年も経てば、事件だって世の中から忘れ去られていきます。ただでさえ風化しかかっているのに、マスコミの方からの取材が少なくなればなおさら。それは我々遺族にとって大変残念なことですよ」

「家族の中で生き続けている」

取材に訪れる記者たちから「平成生まれ」と聞かされると、やはり隔世の感を禁じ得ない。

「若い世代が記者として活躍する時代です。発生時はみんな生まれたばかりだから事件のことを知らなかったでしょう。さすがに 26 年も経てばこうなるのは目に見えていますが、あらためて月日の流れを感じますね。とはいえ我々は常に犯人を追いかけていますし、決してあきらめていません。時効が撤廃された今、逃げ切ることはできない。覚悟を固めて出頭すべきだ」 賢二さんは今年の命日も、事件現場の最寄りとなる京成電鉄柴又駅前で、情報提供を呼びかけるチラシを配る予定だ。新型コロナの影響で、2 年間中止していた警視庁 亀有署の捜査員も今年は再開する。

あれから 26 年——。 賢二さんが最近、気づいたことがある。順子さんの 3 歳上の姉、亜希子さん (51) が生まれたばかりの頃のことだ。まだ 1 人っ子だったので可愛がって「あっこたん」と呼んでいた。ところが順子さんが生まれ、姉としての自覚を持ってほしいと「お姉ちゃん」に変えた。以来、小林家では亜希子さんのことをそう呼び続けている。「でもその呼び方って順子目線なんです。事件から 26 年が経過した今もなお、お姉ちゃんのまま。もはや妹がいないんだから、本来はお姉ちゃんじゃないよね？ でも順子目線は変わらない。順子はこの世に存在しないけど、我々家族の中では生き続けているのです」 そんな順子さんへの思いを胸に、賢二さんは今日、柴又駅前に立つ。

水谷竹秀 (みづたにたけひで) ノンフィクション・ライター。1975 年生まれ。上智大学外国語学部卒。2011 年、『日本を捨てた男たち』で第 9 回開高健ノンフィクション賞を受賞。10 年超のフィリピン滞在歴をもとに「アジアと日本人」について、また事件を含めた現代の世相に関しても幅広く取材。5 月上旬までウクライナに滞在していた。